

# 願掛木

む

かし、陸奥国むつにくに(現在の青森県)

小左井村の伊勢屋与兵衛という人の持船が、村松沖にさしかかった時のことです。運悪く台風にまきこまれてしまいました。

波間に船をのみこみ、荒れ狂う海の上で、船員たちは、なすすべもなく、ただ海に投げ出されないよう、必死で船にしがみつくばかりでした。

何度も何度も山のような大波をかぶり、船員の誰もが、もはやこれまでか、とあきらめかけていた時です。

「そうだ、村松の虚空蔵さんだ。

虚空蔵さんにお願いしよう。助かる道はそれしかない。」

誰言うとなく話がまとまり、めいめいが必死の思いで自分の髪の毛を切ると、持っていたお金をその髪で結びあわせ、はいだ船板の一枚にうちつけて海へ流しました。

「虚空蔵さん、お願いです。お助けください。」

船員たちは、暴風雨の中、波をかぶりながら、ただひたすら祈り続けました。

その願いが通じたのか、しばらくして嵐がやみ、船員たちはみな、村松の海岸へ打ち上げられて助かったのです。その後、願をかけた木片も浜へ流れつき、その

木片は今でも虚空蔵尊の寺宝として残っているのだそうです。

この木片は、願掛木、霊験木、護摩木とかいわれています。



萬